

# 「アースキーパークリスタルPochan」と 144000の光の魂を持つ仲間たち

第4回

アースキーパークリスタル協会 会長 小川雅弘



おがわ まさひろ

1960年、高知県高知市に生まれる。立教大学を卒業後、石油会社を経て、運輸事業や株式会社クリークファーム地域研究所代表を務める。その他、NPO法人の活動や、地域の発展に尽力する一方で、アースキーパークリスタル協会会長を務める。理想郷を築くという夢を実現するため、講演会活動なども活発におこなっている。

事務局 〒780-0053 高知県高知市駅前町4-10 株式会社クリーク内  
FAX: 088-826-6016  
e-mail: info@earthkeepercrystal.com

アースキーパークリスタルPちゃんがやってきた我が家は、滝のある広い家でした。

ちょうど私が生まれた50年ほど前、父が我が家を購入しました。今回のPちゃんの物語には、この家の庭が重要な鍵を握っていました。

## 龍馬の初恋の女・平井加尾の庭 (吉野園)



関が原の合戦に敗れた西方の軍師、遠藤遠江守義範が土佐に落ち延びてこの地に居をかまえたのが、庭の歴史のはじまりだとか。

広さは約660平方メートル。ただしこれは主庭の面積で、前庭、横庭を合わせると正確な数字はわかりません。父が買った当時は荒れ放題で、ジャングルのようなだったといいますが、丁寧に手をいれて庭として生き返らせました。中心に高さ3メートルの巨石があり、石橋のかかる池があり、ところどころに石灯籠が配されています。植えてある植物は200種類ほど。一説には、土佐の生んだ植物学者・牧野富太郎博士が調査して頂いたとか。春には桜、サツキ、初夏には滝のそばの高山植物が咲き、秋には紅葉と四季折々に違った表情を見せてくれます。

江戸時代には山内家家老の奥屋敷であったとも言われ、明治維新当時には板垣退助らがこの庭をのぞむ一室で謀議をめぐらせたとも。

歴史の舞台になったこともある由緒のある庭なので、勝手に手を入れるなど、受け継がれて



きました。私ももちろん、その言い伝えを守っていて、枯れた木を植え替えた以外はそのまま残しています。

つい最近、庭の一部の竹やぶのようになっていく場所と呼ばれているような気がして、見に行きました。竹やぶをかきわけていくと、碑が建っているのです。実はうちの庭は半分で割っていて、うちは母屋の庭のほうを50年前に買わせて頂きました。あと半分は元の持ち主の人が所有しており、竹藪になっています。もともと遠藤遠江守義範という人がつくったことになっ

ていましたが、具体的な物証はないと思っていました。しかし、ありました。見づらくなっていた字を読むと、遠藤遠江守義範という名前が書いてありました。

410年程前、関が原の合戦で負けて落ち延びてきた遠藤遠江守が私に何か言いたいことがあったのでしょうか。やはりこの地には何か不思議な力が宿っているようです。

昨年、私は地元の新聞社から取材を受けました。私というより、わたしの家の庭、吉野園が紹介されたのです。Pちゃんのことではありません。

『龍馬伝』に出てくる龍馬の初恋の相手、平井加尾（1838〜1909）が晩年に過ごした場所が、わたしの家の庭であることが判明しました。

今回の大河ドラマがなければ、私自身、加尾さんの存在は詳しく知りませんでした。

地元、高知県出身の女優、広末涼子さんが演じたことでも注目され、加尾さんの生涯にスポットが当たりました。県立坂本龍馬記念館の館長のお友達の歴史家の方が加尾さんのお孫さんに直接いろいろと聞いたところ、

「わたしがおばあさんと住みよったのはこの家です、高知市の南の山の近くで、こんな庭が

あつて……」

という話から、どうも私の家の庭ではないかと判明したようです。

「おまえのところの庭の云われをしつちゅうか？ 加尾が住んじよつたがぞ」

もともと知り合いだった記念館の館長にいわれ、私自身もたいへん驚きました。

平井加尾は土佐勤王党幹部・平井収二郎の妹。

土佐藩15代藩主・山内容堂の妹が京の三条家に嫁ぐ際に、御付役として上洛し、三条家に仕えました。その際、京の動静を兄に報告するなどしていた行動力を買った龍馬は、加尾にいろいろと手助けをしてもらっていました。

けれど龍馬の脱藩後、平井収二郎は加尾に龍馬と縁を切るように言います。その後、龍馬が

おりようと結婚した1866年に、加尾も27

歳で元・土佐勤王党員の西山志澄と結婚します。

西山氏が明治末期に庭園を購入したと記した文献が残っているため、西山志澄と加尾が晩年の一時期を庭園ですごしました。平井加尾のお孫さんを庭園に案内したところ「この庭です」と思い出されて、実際に住んでいたことがはっきりしたのだとか。

取材があつた昨年の5月、私の家の庭で『出張・近江屋対談 平井加尾が愛した庭で』という会が催されました。主催は坂本龍馬記念館です。



春はウグイス、ホトトギスがさえずり、庭にしつらえた滝から山の新鮮な水が池に流れ込む、とてもいい季節です。

まずは一弦琴の演奏です。加尾は龍馬の姉、坂本乙女と同じ一弦琴教室の仲間だったのです。そのため、龍馬とは幼なじみでした。

その後、加尾さんが愛した庭のことを歴史家の方が話してくださいました。

龍馬とは結ばれなかった加尾さんは、龍馬と再会できなかったことを「女子一生の痛恨」と記しているとか。

晩年になり、庭で龍馬を思い出すことなどは

あったのでしょうか。

文久二年（1862年）3月24日、当時28歳の坂本龍馬は「吉野の桜を見に行く」と言って自宅を出ました。脱藩の準備は、すでに整っていました。

吉野の桜というのは私の家の庭も含めて付近一帯の桜のことをいいます。龍馬は私の家の庭に咲く桜も眺めて行ったのかもしれませんが。

脱藩するときに立ち寄ったといわれている和霊神社は歩いて10分ぐらいのところにあります。ということとは、今から約150年前、脱藩を決意した龍馬が並々ならぬ決意で私の家のすぐ近くを通ったということ。龍馬は「我ら再び生きて故国土州の土を踏まず」とこの地を捨て、日本全国を飛び回るので。

夢多き春、抱えきれないほどの大きな野望を胸に、龍馬は二度と振り返ることがなかったのです。ここが、最後の地なのです。

龍馬は5年後に亡くなりますが、脱藩してからの5年間、日本史を変え、日本を洗濯するよきな大仕事を成し遂げるのです。

土佐の山桜は咲いて、すぐに散る。

龍馬の目に、吉野の桜はいったいどのような

映ったのでしょうか。



青い空を背景に咲きほこる桜を見たのでしょうか。

龍馬が見たかった桜とは、日本の未来……龍馬にとっての理想郷だったのではないでしょうか。この地に立つと、理想郷を夢見ずにはいられないのかもしれませんが。

この土地の波動が変革というキーワードには当てはまっていくのではないのでしょうか。そんなふうに感じています。

新しいものを作り出していく……時代が変わっていくときに何かのエネルギーと繋がっているように思います。

そのエネルギーがPちゃんを引き寄せました。